

アルトールにおける神・イエスと身体・演劇

身体変容技法研究会
2023年9月16日

加藤 敏 小山富士見台病院 自治医科大学

アウトライン

- I アルトールの生活史
自我に関する内省(6歳時)
- II 残酷劇
- III 精神障碍顕在発症
- IV アルトール後期(Rodez病院入院中・退院後)の作品・思索
①「テッサン」 特徴 意義
②新作言語(舌語)を交えたエクリチュール
聖史劇論
- V アルトールにおける一貫した主題神・イエス
Non-dupes errent (J Lacan)「欺かれぬ者は彷徨う・道遥する」

西欧哲学・思想の根底を成すキリスト教

神・イエス
様々な解釈(+)
様々な様態で個人、思想に登場
西欧芸術、哲学、思想の思索をする上で、
決定的な契機、骨格となる例
神
フロイトーラカン精神分析の鍵言葉「無意識」に対応

神・キリストの(無意識の)殉教者Artaud

ヘルダーリン・ニーチェの並ぶ狂気に陥った悲劇の思想家
Artaud 現代のエクリチュールの先取り
狂気内包性思想・詩作・芸術
神・キリストの(無意識の)殉教者
自己治癒ー復活の主題
アルトール 白日のもとに晒された無意識の殉教者⇔ブルトン・フロイト
ヘルダーリン・ニーチェと違う点
①アルトール passion 熱情・受難 イエスの受難に準えられる
②最期まで、透徹した精神を保持⇔ヘルダーリン・ニーチェ

Artaud 永久革命 一貫する「享楽への意志」

生涯、苦悶 これほど激しい苦悶に見舞われ、これを生き抜いた芸術家はいないので
はないか。
終始、〈現実的のもの〉の近くに身をおく
叫び・〈強度〉の生そのもの・「享楽への意志」 Cf ニーチェ
存在を追究
自己の構成を追究
〈怠慢な解決〉妥協を許さない激しい批判、拒否→ Non dupes errent
一貫する激しい攻撃性、批判精神、保たれる透徹した精神
世俗世界を批判したイエス、受難のイエスに自分を重ねる

アルトール

行動面、言語面の著しい逸脱→長期にわたり精神病院に在院、
入院の前だけでなく、入院中、そして退院後一貫して、
時代に大きな影響を与える卓越した思想を展開
アルトール理解
精神医学と哲学・神学ないし思想全般の双方の見地が必要
文献
Roumieux, A., Danchin L. 『アルトールと精神病院』
Artaud et l'Asile. Ed Séguiet, Paris, 2015

一種の神秘家としてのアルト

聖人、聖女と違う点

聖テレジア、十字架の聖ヨハネ

神、イエス・キリストへの愛、キリストを主とする

→ 神経症性神秘体験

⇨ イエスの苦悩を尊重、評価

イエスの先を目指す

→ 統合失調症性Schizophreniqueな「神秘体験」

アルト 享楽への意志→Sade、統合失調症

神を乗り越えることを目指すアルト: 能動性

⇨ 受動性 神の臣下: 聖テレジア 十字架の聖ヨハネ

Artaudにとってのキリスト1

「僕はキリストの先までさらに往くだろう」

"Le christ est l'esprit le plus intèresse de tous les esprits"

「キリストは、すべての精神の中で最も興味深い精神である」p11

"Je ne resterai pas en deca, j'irai au dela , plus loin encore que tout le mal" 「僕はキリストの手前に留まらないだろう。僕はキリストの先までさらに往くだろう」

"Je ferai plus du mal que lui" 「僕はキリストより以上の悪を僕の仕方でするだろう」

"Je m'encule avec dieu en main afin de bien jouir de lui et de lui et de le dessécher en moi et qu'il meure creve" 「僕は神を享楽するために、神と手の中で男色をし、彼は干上がり、くたびれ果て死ぬ」

"L'esprit toujours qui ne s'est jamais trompé et pensera toujours le supreme et le sublime"

「精神はいつも決して間違いを犯すことはない、そして、いつも至上と崇高を考えるだろう」p11

"Esprit âme âme aum aum "p11「享楽を横断せよ、享楽に横断されるな」

P10 Septembre-novembre Cahiers de Rodez 1945 Oeuvre completesXVIII

アルトーにとってのキリスト2

キリスト

「存在を拒否し、性を拒否し、魂を拒否し、

精神になったキリスト」OEXVIII p22

「キリストはすべての精神のなかで

もっとも興味深い精神である」p11

「享楽は尊厳である」p10

"Je suis l'antechrist, ennemi de l'ame et du sentiment"

「僕は反キリスト(イエスの敵)、魂と感情の敵」p41

"僕は、イエスキリストではない、しかし理解不能な存在、イエスキリストの敵」p42

Septembre-novembre Cahiers de Rodez 1945 Oeuvre completesXVII

現代世界に雷 (foudre stirmane) を出現させたアルト

「永続する空虚が、充満を破裂させる」

「僕はkraum、手足を持たない力、しかしその力はまだ姿を見えていない」p42

「僕は自分に手を持たない、僕は、しかし、

いまだ下にあるzobだが、これから上昇していく」p42

"Ce qui est produit à l'origine c'est que j'ai fait partir une foudre stirmane" 「**原初に生じたものは、僕が出現させた雷 (foudre stirmane)**」である」p42

「僕は内的空虚により諸事物を作る、空虚は含む外的充満によってではない。"Car l'e vide perpétuel fait éclater le plein" 「なぜなら「永続する空虚が充満を破裂させるからである」」Septembre-novembre Cahiers de Rodez 1945 Oeuvre completesXVII

アルトー カトリズムの系譜下での生涯、病い、思索・作品

ヘルダーリンの先を行く 終始、雷の平面に身を晒し(晒され) 創作

Cf ヘルダーリン 神の雷雨に晒され詩作

強度intensité がすべての始まり

"Le commencement est le point d'intensité après lequel tout resommece"

「始まりは、最大の強度点で、そこからすべてが再び始まる

「始まりは、存在が始まらなければならない空虚の後の強度点

である」」p96Septembre-novembre Cahiers de Rodez 1945 Oeuvre completesXVII

Cf 雷の平面→強度 CFカオス

「みだらな快楽に堕ちていくことは、苦悩の底知れない力に堕ちていくこと」p97

アルトーの生活史

アルトーにおける幻覚・病的体験

6歳時 幻覚1 自我の不成立

「同じ午後に一つの幻覚を見たのを覚えている」
 「おまえは自分の自我を探しているが、おまえはもうそんなものもっていない。自我は身体ではなくて精神なのだ。そしてその精神をおまえはもっていない。なぜなら俺たちがそれをもっているからだ。おまえは何ものでもないが、俺たちはおまえの天使、おまえの先天的な意識状態だ」^{p141}、
 49歳(1945)『シュルレアリスムとキリスト教時代の終焉』『アルトー後期集成』III
 :自我を探す→自我をもっていない :自我は精神
 司祭・神が先行・支配 「先天的な意識状態」

6歳時 幻覚2 司祭・神が支配 主体を収奪

「そして俺たちはおまえから意識を取り上げるために、おまえに対して蜂起した。おまえの意識は俺たちのものであり、俺たちは決しておまえに返すつもりはない。おまえが俺たちを探しても、俺たちは見つからないだろう。俺たちは(いと高きもの)、即ちおまえをこの世に誕生させなさい、おまえをひとつの存在にしようとなされ、おまえをご自分の意志の下に留めておかれた(主の)司祭なのだ」^{p141} p141、1945年
 『シュルレアリスムとキリスト教時代の終焉』『アルトー後期集成』III

8歳時から自分への問い

「私は8歳の時から、いやもっと以前から、自分は誰なのか、自分であるものは何なのか、そしてなぜ生きるのかをいつも自問していたのを覚えている」(p136)
 →若年から自己について苦痛を伴う著しい内省
 自分の存在について離人体験
 ((想像的) 自我の成立においては、自分には一つのまとまりをもった自我があるという思い込み、つまり一種の虚構を前提
 この仮面は最終的に言語の象徴機能によって可能。
 アルトーにおいてこの虚偽行為(一)本来、自我の成立に際し、構造的な虚偽・欺きが要請される

パーソナリティ:「精神病構造」1

『神経の秤』『冥府の臍』が出版され周囲から注目された後も、精神不調(+)シュルレアリスムの仲間の精神科医Allendyから治療のため、分析を受けるよう勧められ受ける。自分から中断
 「精神分析のセッションは、僕に忘れることのできない刻印をもたらした」
 「偉大の神が僕の意識に侵入する状況において、一種の売春だと思い、羞恥心を感じた」1927年(31歳)11月30日の手紙 p73
 A Roumieux, L Danchin "Artaud et l'Asile" Ed Séguier 2015
 →微細精神病
 →6歳時の幻覚と相似
 →分析家を前に女性化の兆し

パーソナリティ:「精神病構造」2

「精神病構造」⇔「神経症構造」

精神分析の不適応・禁忌事例

天才 Ex ウィトゲンシュタイン:「精神病構造」

Cf 加藤・ウィトゲンシュタインにおける哲学的思索と宗教的思索の同時並行的な発展
 病跡誌92:40-62、2016

アルトーにおける自己身体の形成不全

- 「私は1918年(22歳)にこう答えていた。子供たちは皆、ある無限の性器、この世界にはないけれども、父親の性器に代ってもう一度この世界に押し入ろうとするような、**性器の導管を通して体を作り直さなければならない**」(p137-8) (括弧内筆者)。
- 「父親の性器に代ってもう一度この世界に押し入ろうとするような性器の導管を通して**体を作り直さなければならない**」→
父親を導き手にして世界に首尾よく入場できていない。
→「身体を作り直す」緊急の課題
→「精神病構造」の持ち主
Cf Joyce

6歳時から約40年続く

「神が自我を奪う」とい主題: アルトーの被害妄想の原点1

「**神の神経線維**が数の<カバラ>を作り上げたのは、まさにそれ以上知ることができないという絶望によってなのであり、それは救いがたい無知にすぎないのだ。

つまり、魂と詩をどうしようもないほど知らないということだ」

「**科学は魂と詩を知らない**。神は科学の側にあるのか？」

「というのも、**私が自我を探し求めて約50年経ったのは、花から香りを奪い取るように、神がそれを私から奪いとったからだ**。この香りなき、花なき花である、**精神の科学の<カバラ>を完成させるために**」p123 1945年 「シュルレアリスムとキリスト教時代の終焉」『アルトー後期集成』III

6歳時から約40年続く

「神が自我を奪う」とい主題: アルトーの被害妄想の原点2

「**私の宗教**は、と私は窒息状態の痙攣のなかで虱に答えた。

私から多くの死体を排除したことであり、それで私は彼岸で、私自身の死の深淵の陰で、ベストの解剖剤になったのだ」p143、1945年 「シュルレアリスムとキリスト教時代の終焉」『アルトー後期集成』III

→自我の追及 神が自我を奪ったという洞察

想像的自我が成立しない(一) 内省過剰

内省 言語: 神に由来

アルトー 想像的自我ではない主体を、ずっと追及

思考の破壊・言葉を奪われる事態

「私の思考を破壊する何かがあるのです。私は何であるにせよとにかく何かであることを阻みはしないけれども、言ってみれば**私を宙ぶらりんにしておこうな何かがあるのだ**」p39

「こいつはこそこそと人間をはばかる代物で、**私が見出した語を奪い去り**、私の精神的緊張をゆるめ、私の思考のマスを形作る実質を次々と破壊してしまう」p39 「ジャック・リヴィエール書簡」1925年

→<現実的なもの>にぶつかるとき、私が見出した語が奪われる体験が生じる?。もはや、**既成の言語は通用しない事態?**
言語の本来の場所である神へと洞察が向かう?

アルトーの基本病理の宗教的背景

アルトー 神による収奪

アルトー6歳で: 自我がないことを内省: 「精神病構造」主体の露呈

加藤 Artaud: **最初の宗教体験、最初の自我障碍の発現**

「**現実的なもの**」の「裂け目」の近傍に定位

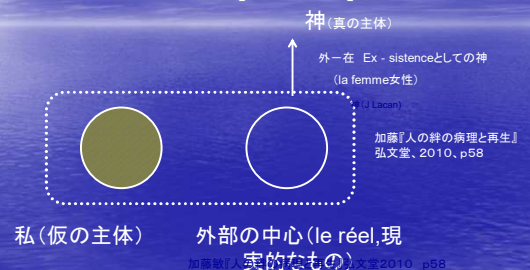
: 6歳より一貫して続く

西欧キリスト教の背景↑

幼児期からカトリック教育

神の実体的存在 神からの眼差し・監視⇔罪意識 ⇔日本

人間主体と<神(l'Autre)>神



前衛演劇家・思想家

24歳(1920年3月)

パリへ移り、物書きとして活動 詩・エッセイ

前衛演劇の創始者の一人

演劇の稽古30歳—32歳(1926—1928)

ロジャー・ヴィトラックとともに『アルフレッド・ジャリ劇場』創始

ヴィトラックによるオリジナル作品の監督

ポール・クローデルやヨハン・アウグスト・ストリンドベリ作品の監督

30歳—31歳(1926—1927)に演劇『血のジェット』公演開催

残酷劇 théâtre de la cruauté(第一宣言)「新フランス評論」
35歳(1931)1

「この言語は、**呪文の語彙**を作り出す。それは声を張り上げて、声の振動と性質を利用する。狂わんばかりの足拍子をとる。掘削機のように音を叩き出す」「感受性を興奮させ、痺れさせ、魅惑し、縛めとることを狙う」p148

「人間の神経的磁力を利用して、芸術や言葉の通常の限界踏み越えさせてくれるはずである」p151

「全上演」：「**叫び**、…、驚き、あらゆる種類のどんでん返し、…、**光の輝き**、**声の呪術的な美しさ**、**調和の魅力**、**音楽の珍しい響き**…」p152

加藤 残酷劇の時期(35歳)のArtaudが創出する自己(・芸術)表現の方法
残酷(cruauté) 不協和音、反リズム、呪詛・叫び

残酷劇 théâtre de la cruauté(第一宣言) 「新フランス評論」35歳(1931)2

「あらゆるスペクトルの基盤に、**演劇という要素**がなければ、演劇は不可能である」p161

「**リズムと音の半狂乱の連打**」p164「**精神と言語のあらゆる衝動的動作**」p164-5

「プログラム」「聖書と歴史による<エルサレム占領>**流れ出る血の赤い色と**、
照明のなかで見てとれる人々の**精神的虚脱感とパニック**」

【残酷劇(第二宣言)】1932年(36歳)「**不協和音の使用も必要となる**」p208「**運動、舞踏、儀式、音楽、欠落のあるメロディ、急転回する対話など**」p213

1935年 シェリーの劇詩『チェンチー族』を基に戯曲

精神病顕在発症：聖パトリック杖エピソード1

1937年6月(41歳) メキシコから帰り、薬物依存治療後3か月

Cécile Schrammeとの婚約 相手の財産家の父から批判 →破断

アルトー：幻覚・妄想多産期 moment fécond 急性精神病

顕在発症の契機 婚約、相手の女性の父との出会い

Artaud のパーソナリティ構造→精神病構造

「神を保持している」という杖をもって、アイルランドに行くことを決める。

聖パトリックの杖を返しに行くのが目的。

1937年8月14日(41歳)

Cobhに到着 p89 AA

→病的旅行

精神病顕在発症：聖パトリック杖エピソード2

アイルランドに着くやいなや、孤独に襲われ、言葉が通じない困難、経済的困難にぶつかる。

助けを求めて、電話をフランスにする。しかし、つながらない。p90 Artaud et l'asile 病的旅行

1937年9月

ダブリンのJesuit Collegeの門をたたき、泊まりたいという。断られ、怒る

1937年9月23日

刑務所に入れられる。Cobhから Havreに送られる。警察が介入し、精神病院に送られる。p93 AA

精神病顕在発症：聖パトリック杖エピソード3

アイルランドからAnne Mansonへの手紙

「僕は20日余りしたら<神の名>のもとに人前で話をしなければならぬ。

私の生と誕生には秘密があるから」

「私は**キリストの過程の中に受肉しているHindous**

Brahmaniquez Shivaに促されて、**諸形態を破壊し、諸形態の転換と昇華**、あらゆる存在の絶対への回帰のために話す」p90

AA →社会を全面的に転換する使命感：精神の革命家アルトー

「彼らは、僕のことを誇大的ないし躁病的と思うだろうが、かまわない」と手紙の中に書いている。p90 AA

→誇大的な宗教妄想 キリストに促される要素

多少の二重見当識(+)

アイルランドへの出立

聖パトリックスへの想像的同一化

聖パトリックス

イギリス・ウェールズでケルトの家庭に生まれる。

16歳でアイルランドの海賊に拉致 奴隷として売られる 脱走し、神学を学ぶ

アイルランドに行き、キリスト教を伝道 カトリック化

→アルトー:突然、アイルランドに行くことを決める 幻覚・妄想に支配される要素(+)

この時点で、**カトリシズムに帰依**し始めている。

もともとアルトーが家庭で、学校で、学んだカトリックへの回帰

聖パトリックス杖エピソードの反復的想起2

「私は振り返り、杖の一撃で挑発的な警官を地面に倒した、そして**戦いが勃発**したのだ。制服警察が突然やってきて、**情報機関の指図**で私の側に立つと、私服警察たちと戦ったのだ」p15
:精神病院入院中、とくにロデ病院で**何度も書き記す**。退院後も何度も語る。

→想起:杖の主題一貫 辺縁変化:加工(+)

→薬物中毒の影響?

CF 清水光恵 加藤敏「発病期の核心点」の反復的想起について統合失調症の発病に関する自伝的記憶の精神病理学的考察 精神神経誌 104:758-780, 2002

聖パトリックス杖エピソードの反復的想起3

「だがもう杖の力に誰かが驚かされることはないだろう」

「もし杖が**聖パトリックスの杖**であり、**イエス・キリストの時代にエルサレムで植えられたもの**だと見なされていることを思い出したいと思うなら」→追想妄想

杖→イエス・キリスト

「ところで私は**イエス・キリストである**などと言っているのではないが」

「この杖が**私自身が植えたものである**ことを覚えていて」p15

→追想妄想「私はアイルランドの杖を再び見出すだろう」p24

「アルトー・そのほんとうの話」1945-8「アルトー集成III」

アルトーの病態

サンタンヌ病院での診断 Nodet医師

「バラノイド構造をもつ**妄想症候群** 活発な被害妄想、母からの被害、警察からの被害、ヴァインーの人々からの被害」

母の遺棄を拒否

「妄想的な錯誤、さ人格まざまな妄想観念が混ざり、浮動的」

「人格の二重化」

「**孔子の杖と聖パトリックの杖**を併って、アイルランドに赴くことから始まる折衷的な誇大妄想」

「5年前からヘロイン、コカイン、アヘンチンキ中毒」

「**文学的野望がある**。たぶんそれは、妄想によって靈感を与えられていることと切り離せないだろう」AA

Rodez 入院中(1943-1946)の Artaudの自己(芸術)表現の方法

①一連のデッサン

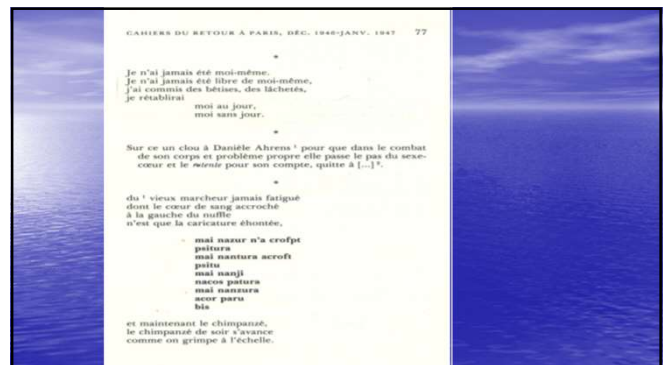
②新作言語を連ね、これを交えたエクリチュール、叫び
舌語glossalie →叫び:強度

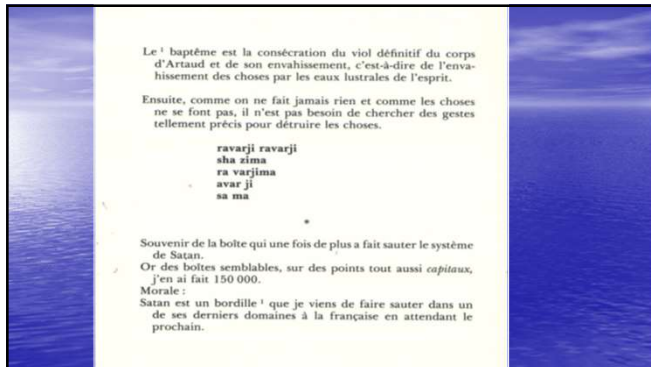
加藤 Artaudの主体再生・身体構成の試み

CF **残酷劇の時期(35歳)のArtaudが創出する自己(・芸術)表現の方法**

残酷(cruauté) 不協和音、反リズム、呪詛・叫び

→**共通性(+)**





Artaud おける一連のデッサン

Rodezに入院中(1943-1946)↑↑
自己を再構成する営為
cf 死後デッサン展

アルトーが描く自己像 Le visage humain

“ ARTAUD Antonin, [juin 1947],
「人間の表情は、暫定的なもので、身体の革命的な抗議から残ったものすべてで、身体は、この表情には合致していないし、したことはない」
「僕は芸術と手を切る」: 制度化された芸術への抗議
アルトーが描く自己像 : 身体の革命的な抗議を描く

アルトーの自画像の特色

悲痛な叫びとしての自画像
「サド的で、恐怖に震えている人間の表情を描く。
その表情は我々を正面から見ている」
「目は大きく開いている」
「人間の絶望的な追及を強調」
「自画像は、吹き込まれた言葉を通し、自分を構築することを目指す」



ロデでカトリックを信心→離反

1937年(41歳)から1945年(49歳)の間、
「深く宗教的で、キリスト教徒」
ロデにおいて、朝教会に行き、跪いて祈る。
アルトーは、訪れた友人DP Boullocを改宗させようとした。p745 AA
1946年(50歳)以後→「私は洗礼もミサも否定する」
「内面的次元にあって、いわゆるイエス・キリストの光臨ほどに、
いまわしい人間の行為はほかにない」²³⁷
1947年(51歳)『神の裁きと訣別するため』
アルトー : キリストの蘇り、贖いの死の信仰をはげしく否定
大きな転回 ロデでの信仰→宗教妄想の延長線?

ゴルゴダの坂を上がり、磔刑をされる受難のアルト・イエス

「自分がイエス・キリストだと思い込んでいるということではなく、イエスのものとされた苦しみを本当に実際に耐え忍んだ、あの歴史的な真正な受難者だと思い込んでいるということなのだ」p325

「200年前のあの男だったのは彼だということを **ゴルゴダで 十字架に、T型十字架状の、一種の机に縛り付けられた男**、そしてその男は私に言った」
→ロジェ・ブラン→アルト

「**十字架に縛りつけられ、そして特に釘で打ち付けられた私**にこう言ったのだ」p324 1945-8(49歳-52歳)「ロジェ・ブラン出演、ヴィユ・コロビア座の『谷の影について』『集成III』」

→ゴルゴダのイエス、十字架上のイエスに自分を見出す。
→「ロジェ・ブランがゴルゴダで処刑された男」: 混乱した語り
→薬物の影響? 意図的に語っているのか?

アルトによる聖史劇評価

→「残酷劇」のモデル: 後年の演劇論

「舞台とは、どんな人間も免れ得ないと思わせる**激しい悪徳への欲望が明らかになる**選ばれた**場所**であり、ある古代の作家たち、特に**聖史劇**をつくりあげていた聖職者たちの密かで魔術的な一体化の力によって、演劇がそうした欲望を生み出し、分岐させる場所である」p114

「フランスの演劇は1千年前、人々が書物に記すことも恐れた**崇高な科学**であった」p10

→ゴルゴダのイエス、磔刑: 残酷劇

「現代の**精神分析家**たちは、教会の広場で演じられた聖史劇よりもはるかに効果が薄く、道徳的に負しい方向でそうした科学をやっと見つけたところなのだ」p113-4

「フランスの聖なる原理への回帰」1945年(49歳)『アルト後期集成III』

聖史劇を精神分析に擬える: 死の欲動の主題化?

聖史劇「苦しみであり、病のように魂をとらえて試練の劇的な恍惚状態」: 1

「その自我は**攻撃的**で隠れている。
それは**真欲**で、**性的な平面**で生きることに執着している。
まるで貫通する攻撃性が自我の原理であるかのようであるかのようで、我々の存在が**痛癢質の横糸**と、この**罪の痙攣**以外に表現方法や出口を持たないかのようである」
→死の欲動
受難 = 享樂としての聖史劇

聖史劇「苦しみであり、病のように魂をとらえて試練の劇的な恍惚状態」2

「そうしたことを聖史劇が自らの隠れた秘密の中で我々に示したのだ」なぜなら中世の聖史劇は**苦しみ**であり、病のように魂をとらえて**試練の劇的な恍惚状態**であったからであり、精神や魂を回復させる免疫をつけさせてくれたからである」p125

「フランスの聖なる原理への回帰」1945年『アルト後期集成III』

→イエスのゴルゴダ、十字架上のイエス、**受難**
→恍惚状態→享樂(Jouissance, J Lacan)→アルトが求める身体 corps sans organe アルトにとり、死せるイエス(一) 復活するイエス(一)

Artaudにとっての苦悩

“La douleur est dignité” 「**苦悩は尊厳**である」 “Le mal indignité” p9

“Traversez la jouissance et ne vous laissez pas taverser par elle” 「享樂を横断せよ、享樂に横断されるな」P10

Septembre-novembre Cahiers de Rodez 1945 Oeuvre complètesXVIII

享樂への意志→Sade、統合失調症
能動性↔**受動性**

身体corps 絶望・深淵

“les corps sont des douleurs désespérées ,des corps abîme ,l’abîme est un corps—plexus externe de cet interne en même temps ”

「諸身体は、絶望的な諸苦悩、深淵の身体、深淵は身体、この**内的なもの**の**外的脈絡叢**」 p38Septembre-novembre Cahiers de Rodez 1945 Oeuvre complètesXVII

身体が絶望、深淵であるという洞察
「同時に、内的なものであり、かつこの内的なもの(身体?)の**外的脈絡叢**」
→トポロジカルな身体理解?
Artaudの言う「深淵としての身体」→舞踏演劇(?)

アルトーにとっての神

”Dieu est un ver enté sur nous tous par negligence de quelques ames” 「神は、幾つかの魂の怠慢による、われわれすべての上にある雲状のミミズ」p55

神：制度化されたキリスト教の神⇒イエス・キリスト

アルト：宗教を「怠慢な解決」とみる

「虚無を、虚無の過ちを前にして堂々巡りをしているキリスト」 蘇るイエスではないイエス

「ひとりのキリスト、**当惑してごちない、虚無を、虚無の過ちを前にして堂々巡り**をしているキリスト、つまり精神一霊という言葉で了解される

「アルトーとそのほんとうの話」1945-8アルトー集成III

→アルトが評価するイエス 復活、贖いのイエスではない、**虚無を、虚無の過ちを前にして堂々巡り**しているキリスト
アルトの姿→キリストを手引きにした無の主題化

恐ろしい苦悶・恐ろしさで打ち立てられる後期 アルトの存在：享楽

「というのも、私の存在は美しいが恐ろしいからだ。それが美しいのは**恐ろしいから**にすぎない」

私の存在：「**恐ろしい、苦悶、恐ろしさで打ち立てられた**」p175

「**苦悶を愛さなくてはならない**」p175

1946年6月7日 「病人たちと医者たち」『アルト集成III』

→享楽（ラカン） 強度（ドルーズ）の思想 Cf ニーチェ、パタイク
反有用性の思想

→残酷劇

「いつまでも生き続けるゴルゴダの身体」 内面的生の否定

「いつまでも生き続けるゴルゴダの身体のように
磔刑の激しみによって

傷めつけられ踏みこじられ

砕かれ集められた一つの身体は

内面的生のあらゆる幻影に委ねられた精神を超えるものです。

内面的生とは あらゆる夢幻的な悪臭のする獣化の酵母であり種子にすぎないので
す」p109「ラヴェルへの公開質問書簡 1947『神の裁きと訣別するため』

アルトが目指す身体：永劫に苦悶を蒙るイエスの身体

永劫の受難のキリスト、享楽のキリスト 不死性

⇒ 死せるキリスト 復活するイエス

キリスト教 ラカン

キリスト教

「キリスト教だけが、我々が**神の死**と呼んだ真理の本性に、**キリストの受難**というドラマによって十全な内容を与えている」

『倫理』下p32

「人はキリスト教において終に、**享楽するもの、それは神**であるという、神を発明した」

SemXXEncore,p70

十字架から降り、磔刑から逃れるキリスト

51歳(1947)『神の裁きと訣別するため』

「キリストという名の男は 神という毛虱を前にして 身体なしで生きること
に同意したものにほかならない」p28.」

神：毛虱に例えられる（コレラに加え）

「ところが**十字架から降りてきた人々の一団**がある 神は久しい前から彼を十字架に釘づけにしたものと信じていたが 彼らは反乱し、鉄、血、炎と骨で武装し、＜見えないもの＞を罵倒しながら進んでいく

神の裁きと訣別するためである」p28

「神の裁きと訣別する」：キリスト 十字架上で死ぬという神の裁きを拒絶

アルトー：神の裁きを拒絶し、不死のイエスに同一化？

「身体なしで生きる」

「器官なき身体」としてのゴルゴダのイエス

「その構造を作り直すため、これを最期にもう一度、人間を解剖台にのせるとき。私は強調する、その構造を作り直すため、と」

「人間は病んでいる。人間は誤って作られているからだ」

決心して、彼を裸にし、彼を死ぬほどかゆがらせるあの極微動物を掻きむしってやらねばならぬ」

「神、そして神とともに **その器官ども**。」「『神の裁きと訣別するため』⁶⁴⁶ 1947

神の器官→神を信仰する人々

→制度化されたキリスト

「器官なき身体」としてのキリスト:

神の原理から訣別するキリスト;ゴルゴダのイエス 不死のイエス

「器官なき身体」としてのアルトー

追伸「私と誰か どこからきたのか 私はアントナン・アルトーである。そして私はそれをいわなくてはならぬ。それを今すぐにいうことができるからだ」

「**いまある私の身体が飛び散り** 明らかなる 無数の側面をあらわにし 一つの新しい体が **また凝固する**」⁶⁷³

『神の裁きと訣別するため』1947

アルト:ゴルゴダのイエスに擬える

享楽・強度の思想系譜

ニーチェ「Wille zur Macht」 イエスの復活思想(パウロ主義)を批判

→パタイユ『死者』(1939-45)パタイユ『死者』 キリストの道行き、受難をモデルにする

享楽(jouissance)

→アルトー

→ラカン 第2の死(J Lacan)

加藤:ゴルゴダのイエス 十字架上のイエス

→ドゥルーズ

アルトーの病態2

1954年インタビュー Ferdiere 医師 口字病院担当医

人格解体する統合失調症ではない。知的機能保たれている 礼儀正しい AA

Latrèmelière医師博士論文

「アルトー46歳 薬物中毒、慢性幻覚精神病、著しい妄想続く」

加藤

人格水準低下はなく、卓越した思想を創造すること続ける、

妄想型統合失調症+薬物精神病(薬物依存後遺症)

パーソナリティ構造:「精神病構造」統合失調病質、統合失調型

パーソナリティ障害

「極め付きの知性、感性」→天才症候群 Cf ウィトゲンシュタイン

「神の裁きと訣別するため」

1947年(51歳)1月 フランス国営放送番組「詩人の声」

1948年3月(52歳) 薬物過量摂取で死亡

死の1年2ヵ月前、放送中止となる

「神を殺害をしなければならない」

最晩年アルトー:神の殺害、神との訣別

幼少期から収奪・支配・つきまとう神から離れる試み

象徴的父(一)

後期アルトー

虚無に定位→エクリチュール

概念「自我」からの脱却：後期アルトー：

自己探索の到達点（精神分析、仏教の目指すところ）

「私はぞっとするような夢を見た。その時私にはわかった。
「我々は自分のうちどこかどこへ進むことができないこと。そして**自我とは、永遠、無限、普遍性**などと呼ばれる虫けらどもを作り出したあの幻想なのだ」ということが。」
「そしてこうした考えは皆、自分たちを執拗に私を苦しめるあの幻想だということ」p166「私はぞっとするような夢を見た」『アルト集成III』
→「神経症構造」の乗り越え
「精神病構造」の青年期アルトーは、自我が成立していないことを悩んでいた。
青年期アルトー：すでに「他者」・神の支配、侵入を実体的に経験。

深淵に身をおき、深淵を受け入れる後期アルトー

「私は毎日少しずついれば、**深淵のなかに沈みこんでいくのを私は隠すことはできない**」
「**芸術も詩も、**何らかの精神的または・・・知的または性的な活動もする生そのものも、もはやそれを埋めることはできない」
p83『集成II』 → **大いなる受肉incarnation majeure**
アルトは青年時代から、虚無を主題化『神経の秤』『冥府の臍』
「僕の**虚無の函数**として、僕みずからこしらえた形而上学に、自分を直面させること」p145「ある地獄日記の断片」1925年29歳
宗教妄想を経て、死せるイエスの主題化を経て、再び虚無が主題化された？

アルトーにおけるエクリチュール

身体を作り直す作業：
言葉ないし文字によるエクリチュールの作業
ロデーズに移ってから多数の著作
随所に、突然姿を現す”Penkta Pentzis Inaritu”
アルトーの舌語(glossolalie)
音だけの新作言語：音韻論的新作言語が多数混入して形成されるエクリチュール
独特なエクリチュールの作業→「器官なき身体」の生成

概念「想像的身体」の乗り越え

概念「自我」との乗り越えと平行 大いなる受肉へ

「**身体を持つとして私たちが苦しめる、魂のあの波動**の最初の刺激を私が自分のうちに感じたのは、1918年のことだ」
「私のうちで燃えていた炎は、まったく別の身体化を必要としていることがわかった」
「ひとつの身体のうちで受肉し、硬い性的身体、おのれの現実の魂の肉体を、
無理やりその身体に押し付けるであろう魂の、でこの大いなる受肉(incarnation majeure)にいたるまで」⁶¹³²
1945年4-5月「シュルレアリスムとキリスト教時代の終焉」『集成III』

アルトーによる生涯の回顧

1946年「病人たちと医者たち」

・「私は一生病人だったが、そうあり続けたい。ただそれだけだ。生の欠乏状態はいつも私の力の過剰について健康であり続けければ充分というピチブルの食器棚【古語では信条】よりもはるかによく教えてくれるからだ」(p175)
「というも、私の存在は美しいが恐ろしいからだ。それが美しいのは恐ろしいからにすぎない。恐ろしい、苦悶、恐ろしさで打ち立てられた」「苦悶を愛さなくてはならない」(p175)。

受難するイエスの苦悶の身体に擬えるアルトー

「ラヴェルへの公開質問書簡」
「いつまでも生き続けるゴルゴダの身体のように磔刑の苦しみによって傷めつけられ踏みこじられ砕かれ集められた一つの身体は内面的生のあらゆる幻影に委ねられた精神を超えるものです。内面的生とは あらゆる夢幻的な悪臭のする獣化の酵母であり種子にすぎないのです」(p109)

アルトーにおける身体の構成

「人間に器官なき身体を作ってやるなら、人間をそのあらゆる自動性から解放してその真の自由にもどしてやることになるだろう」(下線筆者)
 8) (p48)

- 「そのとき人間は再び裏返しになって踊ることを覚えるだろう」
- 「まるで舞踏会の熱狂のようなもので この裏とは人間の表となるだろう」(p48)
- アルトーは、身体を作り直すための方策として「器官なき身体」を作ることを読む。これにより、人間は神から自由になり、本来もっている自動性を回復し、自由になるという。「裏返しになって踊る」ことが、具体的に何を指すのか？。

日本の舞踏

西欧の影響を受けて制度化された既製の身体を括弧入れして、身体を作り直しを文字どおりの自己身体において追及する演劇

アルトーが構想しながら実現には至らなかった演劇？

アルトー：科学、資本主義を創始し、発展させる基礎となるのを神に求める→生政治糾弾

「そしてアメリカ人たちロシア人たちが何から彼らの原子をつくりあげたか知っているかね。p45

→近代社会により駆動される生政治を激しく糾弾

同時に、晩期も神の被害観念(+)

「私はおかしくない。私は気違いじゃない 私は 新しい観念を強制するためにまして、菌が作りだされたといっているのだ」p46 正しい見解の面(+)

→アンテフェストム(木村)の思想家

→二つの狂気(デリダ)